

全国人権連第9回全国大会（2年ごとの開催）は、コロナ感染拡大が進行するもと、昨年の開催を今年度に延期。幹事会は、書面議決により、9月末の幹事会をもって大会とすることを可決。全研や全水などの提案討論も今後行われる。

岡山県家庭教育応援条例（素案）

行政の家庭介入、価値観の押し付けに断固反対

民主県政みんなの会が学習会

岡山県議会の文教委員会と環境文化福祉委員会、憲法違反で家庭教育の名を借りて介入しようとする「岡山県家庭教育応援条例素案」が発議され、前回の「夫婦別姓に反対する意見書」に続く、大問題となっています。震源地は日本会議系の平成ビジョンと連携する自民党県議。

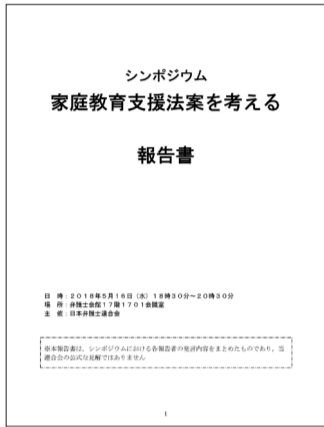
今回の「岡山県家庭教育応援条例素案」は、名称は多少異なるものの、熊本、鹿児島、静岡、岐阜、群馬、徳島、宮崎、茨城、福井に続いて自民党が成立を目指すとする条例案です。

岡山の場合は、茨城県に視察に行き委員会発議という形態で今回出されました。

条例（素案）の自身は、「応援」とか「支援」とか、「いい方は違うものの、学校等や地域住民等の役割に加え、「親としての学び」「将来、親になるための学び」について、「いっしょあるべき」と一方的な価値観の下にいわゆる「親学」を押し付けるものとなっています。

岡山では、岡山県人権連も加盟している「民主県政をつくるみんなの会」で5月24日に岡山県高教組の村田秀石執行委員長を講師に学習会を開催。

村田氏も、条例は、「こうあるべき」とする考え方の一



日弁連は憲法24条等改悪反対の立場

認されました。



全水100周年を迎え、考えること⑭

民主主義の日本をめざして

「川崎・三菱大争議」100周年 大争議は全国水平社創立に

兵庫地域人権運動連合 事務局長 前田 武

1918（大正7）年8月、全国で米騒動が起き、神戸で鈴木商店が焼き討ちとなった。その3年後の1921（大正10）年6月から8月にかけて、川崎・三菱大争議が勃発、3万5000人のストライキから100年を迎えた。

さらに、翌年の1922（大正11）年3月には、部落差別からの解放を求めて、全国水平社創立大会が京都であった。

全国水平社を支援した布施辰治

ここで、一人の人物を紹介したい。布施辰治（1880-1953）である。大正から昭和の戦後にかけて活躍した弁護士である。貧しい人々、虐げられている人々の味方として、労働運動、廃娼運動、小作救済、水平社運動、普選運動、朝鮮独立運動、政治弾圧被害者救済などに関わり、権力者側から「極左弁護士」と呼ばれ、そのため、治安維持法違反で実刑を受けた。

「労・農・水の三角同盟」

1923（大正12）年に結成された全水青年同盟は個人糾弾から政治闘争への転換を主張した。県内の地域水平社の中から労働運動と農民運動との連携。労農水三角同盟の運動へと発展していった。

つまり、地域内外の農民や労働者が、同じ階級的立場に立って連携して闘い、支援しあっていたのである。部落問題解決は「国民融合」でとらえて

年、群馬県世良田村（現・太田市）で、世良田村事件が起きた。小学校教師が部落の児童へ差別対応した。水平社は抗議した。しかし、周辺村人は「差別は当然」「部落民の増長」ととらえ、計画的に部落を襲撃した。寺の鐘が襲撃合図で、120人の部落住民に対する暴行と家・家財焼き捨てが3時間にわたって実行された。無抵抗で暴行された被害者の部落住民も起訴された。布施辰治は、現場を見て、この差別暴力事件を深く心に刻んだ。布施辰治の墓石に自作の句が刻まれている。「生くべくんば民衆とともに死すべくんば民衆のため」は、世良田村事件を念頭に思って詠んだ句と言われている。

の世も権力は、その支配のために国民を分断させる。当時の状況をつかみようもないが、川崎・三菱大争議は、多くの部落住民も参加し、後の労働者・農民との連携が水平運動とつながっていたと思われる。